〈あとがき〉

『大阪大谷国文』は、本号をもって創刊以来五十年の節目を迎えることとなりました。五十年前の一九七〇年といえば、高度経済成長期の象徴的なイベントであった日本万国博覧会が大阪を会場として開催された年です。現在、大阪では、その万国博覧会の再度開催に向けて様々な動きがあります。同じ行事であるからこそ、当時から現在への社会の変化に思いをいたさざるを得ません。この間、本学会の母体となる国文学科の名称は日本語日本文学科へと変更され、大谷女子大学は共学化へと舵を切り、大阪大谷大学となりました。文学部単科だった大学組織も現在は、教育学部・人間社会学部・薬学部を加え、四学部六学科体制へと発展しています。時代の変化に対応した結果ではありますが、社会の変遷の中でも揺るがぬ本学会の礎を築き、今へと継承してくださった先達への感謝の念に堪えません。五十周年を記念して、本号では、その間の歩みを振り返る様々な企画を取り入れて編集しました。手に取っていただいた皆様のそれぞれの思いに、この特輯号が寄り添うことがかなえられていれば幸いです。

もう一つ、お伝えしなければならないことがあります。一九九八年の御着任以来、二十二年間にわたって日本語教育分野を担当してこられた樋口裕子先生が、本年度をもって定年退職となります。樋口先生は、本学初めての日本語教育分野を専門とされる教員として赴任し、日本語教育コースの基礎作りと発展に尽力されました。その間、日本語日本文学科長としての四年間、大学院文学研究科長としての二年間、重責を担い、大学組織の維持と発展にも力を注いでくださいました。樋口先生の御着任は、日本文学の全時代それぞれの担当者に加え日本語学・中国文学担当者を揃えた本学科の教員構成に、さらに国際性を付与するものでした。先生のもとで育つ学生達は、世界がグローバル化のうねりを見せる中、「日本語」はけっして「日本人」だけのものではない、という当然の帰結を体現する存在となっています。二十一世紀を目前にして、国文学科が日本語日本文学科へと発展的に名称変更してい

く流れとなったのは、先生の存在を抜きには語れません。明るい笑顔と朗らかなお言葉で教員・学生を和ませてくださった先生のあたたかな眼差しが、今後も本学・本学科を見守りくださるようお願い申し上げます。

なお、大部となりました本号の企画編集には、横田隆志先生の大変な御尽力を賜りましたことを記し置きます。

最後に、本学会、そして母体となる日本語日本文学科が、これからも、青竹のように天を目指して節を重ねつつ、大樹のように深まる年輪を刻み続けることを祈念して〈あとがき〉といたします。

日本語日本文学会代表　鈴　木　利　一